

当センターでは、さまざまなこころの不安・悩み、心理・発達の問題について、ご相談に応じます。なお、ご相談の内容について秘密は固く守られます。

光華*こころの手帳

申し込み方法 *必ず事前にお電話にてお申し込みください。(完全予約制)

第18号

電話番号 : 075-325-5281

受付時間 : 月~土 (祝祭日除く) 午前10時~午後5時

開室時間 : 月~金: 午前10時~午後7時 / 土: 午前10時~午後5時 (祝祭日除く)

料金 : (初回) 3,000円

(2回目以降) 個人面接2,000円 / 親子並行面接3,000円

面接時間 : 1回50分

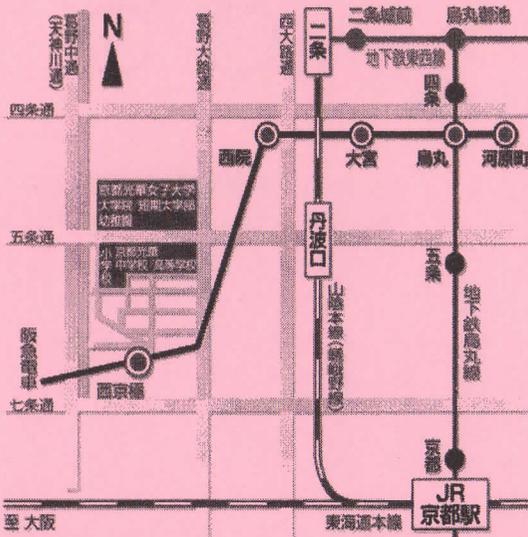
面接担当者: 大学院生(臨床心理学専攻)、研究生(本大学院修了生)

専任カウンセラー、本学教員

*その他、詳細はお電話にてお問い合わせいただくか、下記HPをご覧ください。

URL : <http://www.koka.ac.jp/institution/counseling.html>

地図・交通機関ご案内



阪急京都線

「西京極駅」下車 徒歩7分

JR

京都駅からバス約25分

「光華女子学園前」下車 徒歩1分

京都バス...84系統

市バス...27・32・73・80・84系統

センター受付事務室

五条通 北側

京都光華女子大学内

慈光館地下1階



京都光華女子大学

カウンセリングセンター

光華*こころの手帳

—第18号—

編者 徳田仁子(上山、原田、山川)

発行者 カウンセリングセンター長 長田 陽一

発行所 京都光華女子大学カウンセリングセンター

〒615-0882 京都市右京区西京極葛野町38

平成27年6月発行



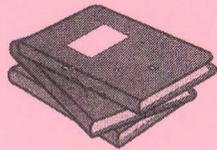
ご挨拶

暦の上ではもう夏となり、暑さが日ごとに増してまいりましたが、皆様、いかがお過ごしでしょうか。おかげさまで「光華*こころの手帳」も第18号を発行することができました。

新しい年度に入り、新しい環境になられた方も少し落ち着かれた頃かと思えます。これからじめじめとする梅雨を迎え、気持ちも気候と同じように晴れない日が続くかもしれません。バタバタしている時には気づかなかったモヤモヤする気持ちや環境に慣れない不安定な気持ちなどはありませんか。

当カウンセリングセンターでは、心の中のモヤモヤする気持ちに、ともに寄り添い、少しでも気持ちを楽しめるお手伝いできればと思っております。

ぜひ、お気軽にご相談ください。



霧のむこう



ながたよういち
長田陽一 (本学教授・臨床心理士)

もう15年くらい前になります。あてもなく入った本屋で、ある本の背表紙のタイトルが目に入ってきました。それは『霧のむこうに住みたい』というタイトルで、エッセイストとして名高い須賀敦子さんの未公開の原稿を集めた本でした。須賀さんのエッセイ集は、しなやかで爽々しい文体と、そこににじみ出る仄暗い情熱のようなものが好きで、それまで2~3冊読んでいました。海外旅行もままならなかった1950年代にパリに留学し、その後イタリアに居を構えながら、ヨーロッパという巨人と独自のスタンスで向き合う彼女の姿にひそかに理想の自分を重ねていたのかもしれません。

霧のむこうに、人はどんな思いを馳せるのでしょうか。霧のヴェールの前には青空が広がっていて、モヤモヤや悩みなどを突き抜けた世界が広がっているのかもしれない。霧は視界を奪って人を迷わせるものです。迷わせるだけでなく、霧のもつ幻想的な雰囲気から、惑わせ道を逸らすもの、何か甘美な誘惑として描かれることもあります。

わずか3ページほどの、本の表題と同名のエッセイは、けれどもこうしたイメ

ージとは無関係です。それを表現しようとするれば、霧を手でつかもうとするように言葉は空回りを始めてしまう気がします。少しだけ本文を引用します。

「こまかい雨が吹きつける峠をあとにして、私たちはもういちど、バスにむかって山を駆け降りた。ふりかえると、霧の流れるむこうに石造りの小屋がぼつんと残されている。自分が死んだとき、こんな景色のなかにひとり立ってるかもしれない。ふと、そんな気がした。そこで待っていると、だれかが迎えに来てくれる。(……)途中、立ち寄っただけの、霧の流れる峠は忘れられない。心に残る荒れた風景のなかに、ときどき帰って住んでみるのも、わるくない。」

初めての風景なのになぜか懐かしさを感じることがあります。荒涼とした景色に安らぎを感じることは、考えてみると不思議ですが、多くの方が経験的に知っていることだと思います。それはたぶん、永遠という観念と結びつけられた自分の死(死後の生)が想起されるからなのかもしれません。死はあらゆる不安や悩みの根源ですが、死という有限性は永遠とのコントラストにおいて、心に前向きな構造的変化をもたらすもののようです。永遠という砂漠や星座のような永遠性もありますが、分け隔てなくすべての物の姿形をあいまいにし溶け合わせていく霧の景色の方が、日本人の心象風景にあうのでしょうか。



大学院研究生コラム



私は普段、移動手段として自転車を使っています。ある夏の暑い日も、目的地に向かうため、汗を流しながら「“どこでもドア”があったらな〜」なんて思いながら自転車をこいでいました。でも自転車をこいでいくと、「こんな所にこんなお店あったんだ」と目に留まるお店がいくつもあったり、「この道はここにつながっているのか」など、新しい道の発見なんかもありました。これは“どこでもドア”を使っていたら気づかなかったなと思いました。自転車に比べたら、“どこでもドア”は行きたい所にすぐに行けるし、しんどい思いもしなくて済むし、とても便利です。しかし、先述したような道中の偶然の出会いはありませんし、こころやからだを使うこともありません。

目的地を目指してただ一直線に進むのではなく、寄り道をしたり、ひと休みしたり、たまに迷いながら進んでいくことが、こころとからだに刺激を与えてくれるのかなと思いました。目的までの過程を大切にしたいと思った、そんな夏の日でした。(O)